How To
Design
Curriculum

カリキュラム・マネジメント・ガイド

ー教科等横断的な視点からのカリキュラムづくりー

三鷹の森学園

このガイドブックの使い方

この冊子は、子供たちに未来を生きる力を育むためのガイドブックです。

この冊子では、未来に向けたビジョンを学校と地域が共有し、目標に向かって進むための一つの方法を紹介しています。それは、私たちの学園が開園からの 10 年間をステップに、次の新たな 10 年に向けて歩み始めるまでのストーリーでもあります。

このガイドブックを通して、ぜひ私たちの描いた夢と、その実現に向けた最初の歩みを追体験してください。そこには、カリキュラム・マネジメントのヒントがあるはずです。

「カリキュラム・マネジメント」って何？

目標の実現のために、学校や地域がもつ力を効果的に結びつけること。

それが、私たちの考えるカリキュラム・マネジメントです。子供たちに未来を生きる力を育むために、学校・家庭・地域がもっている「機会」、「人財」、「環境」などの様々な「教育資源」を効果的に組み合わせて、より質の高い教育を実現するためのデザインと言ってもよいでしょう。

このガイドブックでは、学校と地域、小学校と中学校、教科と教科、といった垣根を跳び越えて、目標の実現に向かって協働することを試みた私たちの事例を掲載しました。

> **「カリキュラム・マネジメント」とは（「学習指導要領（平成 29 年告示）」総則より）**
> 生徒や学校，地域の実態を適切に把握し，教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと，教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと，教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して，教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと

「教科等横断的な視点」とは？

教科等がそれぞれの指導を通して共通の目標の実現に取り組むこと。

それが、私たちの考える「横断的な視点」からの教科等の実践です。

複数の教科の内容を関連付けたり、共通のテーマの下に複数教科の学習を展開したりするような指導も「教科等横断的な視点」による一つの方法です。でも、一定の単元・教材に限られたり、計画や準備に多くの時間を要したりするなどのデメリットもあります。

こうした、いわば「合科的」な考え方とは一線を画した、もう一つの「教科等横断的な視点」による実践、それが私たちの研究テーマです。

さあ、私たちと一緒に「カリマネ」をスタートしましょう！

STEP-1 学校教育をめぐる課題や願いを把握しましょう

カリキュラム・マネジメントは、学校や地域、そして子供たちの実態を把握することからスタートします。毎年実施している学校評価や、保護者・児童・生徒を対象としたアンケート、各種学力調査等のデータが学校にはあります。そうしたデータに基づいて、学校教育をめぐる課題や保護者・地域等の願いを明らかにしましょう。

「学校は、すべての子供が『わかる・できる・かかわり合う」授業づくりを行っている」

私たちの学園が実施した保護者アンケートではこの項目を重要視する回答が全調査項目中最も多く、98%でした。実現されているとする回答も学園全体では 82%と高い水準でしたが、学習内容が高度になる中学校段階では73%という結果でした。

「学校は、積極的に地域の力を活用している」

アンケート結果では重要視する回答が 90%、実現されているとする回答が 81%でした。全調査項目の中で重要度と実現度の差がもっとも小さかったのがこの項目であり、また、それぞれの数値も前年度と比べて上昇していることも分かりました。

「児童・生徒が自分の将来に向かって努力する態度を育てる取組みを行っている」

この項目を重要視する回答は 96%。中でも「大変重要」とする回答が 72%あり、保護者の関心の高さや学校への期待がうかがわれます。しかし、実現されているとする回答は 63%であり、期待に応えきれてはいないことが明らかになりました。

いかがでしょうか。これは私たちの試みた実態把握の一例です。

こうした分析から、地域の教育資源を活用しながら子供たちの主体的・対話的な学びを実現すること、そして、その学びを通して子供たち一人ひとりによりよい人生の実現のために努力する態度や、生涯にわたって生きて働く資質・能力を育むことを私たちの重要なミッションとして位置付けました。

STEP-2　育てたい力を明らかにしましょう

次のステップは、現状分析に基づいて、子供たちに育むべき「力」を明らかにすることです。

私たちの学園では平成 21 年度の開園以来掲げてきた「学園教育目標」を見直すことから着手しました。三鷹の森学園コミュニティ・スクール委員会（学校運営協議会）の協力を得て「学園生に育みたい力」をテーマとした熟議を約 1 年間にわたって繰り返し、これまで「育成を目指す子供たちの姿」を示していた教育目標を「育成を目指す具体的な資質・能力」を示すものへと改定しました。

〔育成を目指す4つの資質・能力〕

- ○ 社会の変化に対応し、自ら学び、知識・技能等を主体的に更新する力
- ○ 自ら問題を発見し、筋道立てて考えたり、試行錯誤したりしながら、問題を解決する力
- ○ 多様な人々との対話や協働を通じて、新たな価値やよりよい社会を創造していく力
- ○ 困難な場面に直面しても、粘り強くかつ柔軟な発想で人生を切り拓いていく力

資質・能力の育成を目標に掲げたことによって、学校と保護者・地域がそれぞれのフィールドで子供たちの生きる力を育むための共通のビジョンをもつことができるようになりました。

STEP-3　地域の教育資源には何がありますか？

多様化し、未来予測が困難とされる社会状況の中にあって、目指す資質・能力を子供たちに育むために学校のもつ力だけでできることは限られています。また、これまでの教育実践を焼き直すだけでは解決しきれない課題が生じることも考えられます。

そこで、次のステップとして地域や家庭のもつ「教育資源」を明らかにすることが重要になります。

三鷹の森学園の学園生が身に付ける力		第Ⅰ期（小１～小４）		第Ⅱ期（小５～中１）		第Ⅲ期（中２～中３）	
		何ができることなのか 何ができるようになればよいのか	地域・家庭の教育資源 地域・家庭の支援	何ができることなのか 何ができるようになればよいのか	地域・家庭の教育資源 地域・家庭の支援	何ができることなのか 何ができるようになればよいのか	地域・家庭の教育資源 地域・家庭の支援
学園の教育目標	社会の変化に対応し、自ら学び、知識・技能等を主体的に更新する力	・興味をもつ。 ・疑問をそのままにしない。 ・親と話す。 ・読書習慣 ・ネットに頼らない。 ・友達と遊ぶことができる。	＊お話会 ＊地域子供クラブ ＊自然 ＊施設（コミセン等） ＊図書館司書の活用 ＊演検	・自分から色々なことに興味をもつ。 ・新聞、ニュース、読書から知識を深める。 ・問題を解決するために判断し、実践できる。	＊図書館（学校・地域） ＊施設（コミセン・天文台） ＊家庭での子どもへの支援、啓発 ＊読み聞かせ ＊地域の専門家の話	・常に新しい情報を取得する姿勢とスキルがある。 ・コミュニケーション能力が身につき、人見知りせず三鷹の外の世界に進むことができる。	○まずは大人が「今を知る」ことが必要（３０年前の古い経験は意味がない） ・三鷹開発のプロジェクトへの参加等 ・「表彰」する・認める機会を設ける
	自ら問題を発見し、筋道立てて考えたり、試行錯誤したりしながら問題を解決する力	・周りをよく見る。 ・分からないことを調べる。 ・本を読む。 ・学校の問意ができる。	＊図書館がもつある。 ＊自由に遊べる公園が少ない。（だから考える） ＊学園サポーター ＊青山学院協働の企画	・学び方や調べ方が分かる。 ・予定や計画を立てて取り組める。 ・困難にめげずに努力していく姿勢を身に付ける。	＊地域に由来した教材（例玉川兄弟）	・ＡＩと共に生きる力がある。 ・失敗を恐れずチャレンジする意欲がある。 ・課題発見と具体的解決ができる。	・地域の大人の姿(本気の背中を見せる) ・困難を見守り、失敗を認め、経験を話す機会を設ける ・森林大とのコラボ ・様々な大会やバトル・オーデション
	多様な人々との対話や協働を通じて、新たな価値やよりよい社会を創造していく力	・自分から挨拶をする。 ・友達を作ることができる。 ・友達と新しい遊びを考える。 ・いろいろな活動に興味を持つ。 ・地域の行事に参加する。 ・自分の好きなこと、得意なことを発表する。	＊防災キャンプ（班別、リーダー） ＊避難所体験 ＊地域行事(お祭り、盆踊り) ＊学校農園 ＊国際交流イベント、CSイベント ＊オヤジ・父親の会 ＊わか竹学級、つばさ、EF組	・自分からあいさつや声掛けができる。 ・集団の中でコミュニケーションが上手にできる。 ・自分なりの考えや視点がもてる。 ・相手の立場に立った思いやりや、気持ちの共感。 ・理論や理屈だけではなく、実践を積む。 ・周囲の人と協力し合いながら問題を解決できる。	＊地域行事 ＊地域のクラブ ＊三鷹自然協会 ＊父親・おやじの会 ＊MISHOP ＊三鷹台盆踊り ＊防災キャンプ ＊コミセン ＊井の頭公園	・各種イベントの立ち上げ、企画、運営、実行、反省ができる。 ・場を作るリーダーシップがとれる。 ・多くの様々なコミュニティーの中で、いろいろな人と関われる。	・地域団体の様々なボランティア ・地域子どもクラブ ・ジブリのボランティア
	困難な場面に直面しても、ねばり強くかつ柔軟な発想で人生を切り拓いていく力	・目標を持とうとする。 ・失敗したら、どうしたらできるか考える。 ・苦手な人と話す。 ・辛いことがあったら人に話す。	＊家庭 ＊地域行事 ＊コミセン ＊習い事や運動クラブ	・意識の切り替えができる。 ・悩み事を自分で解決できる。 ・失敗をおそれない。 ・困ったときには周りの人を頼れる。 ・すぐにあきらめないで、気持ちを切り替えていく。	＊家庭 ＊防災キャンプ ＊習い事や運動クラブ	・自分自身で決めて進むことができる。 ・困難なことがあっても、あきらめずに目標に向けて努力できる。 ・何でも話せる関係を親子で（地域）築くことができる。 ・自ら活躍できる場を地域活動で見つける。	・自ら決めたことを見守り、応援する ・答えを待ち、尊重する ・任せる ・市民マラソンへの参加

私たちの学園では、コミュニティ・スクール委員会での熟議を通して、新しい教育目標に示した４つの資質・能力を「何ができることなのか」、「何ができるようになればよいのか」というイメージにまで具体化するとともに、それを実現するために地域や家庭にはどのような「人財」、「機会」、「環境」があるのかを明らかにしていきました。

もちろん、カリキュラムをマネジメントするためには、学校教育における各教科等の授業実践にも結び付けることができるようにする必要があります。

そこで、義務教育期間の９年間を第Ⅰ期（小１～小４）、第Ⅱ期（小５～中１）、第Ⅲ期（中２～中３）という発達段階に区分し、子供たちの成長に合わせてより具体的なビジョンを共有できるようにしました。

STEP-4 目指す資質・能力を育成するための重点を、各教科等で設定しましょう

次のステップは現場の実践者である教師の出番です。ここまでに明らかになった子供たちと学校教育への願いと期待、そして地域の「教育資源」を踏まえて、どのように学びを展開していくのか。それを各教科等の指導に結び付けて具体的に計画することは、教師にしかできない役割です。

私たちの学園では小・中学校の教師約１００名による熟議を１年間にわたって繰り返し、学園教育目標に掲げた「資質・能力」を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの視点から具体化し、さらに各教科における指導の重点を設定していきました。

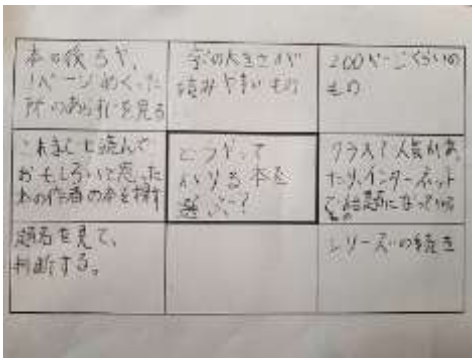
三鷹の森学園の学園生が身に付ける力		第Ⅰ期 （小１～小４） 何ができることなのか 何ができるようになればよいのか	第Ⅱ期 （小５～中１） 何ができることなのか 何ができるようになればよいのか	第Ⅲ期 （中２～中３） 何ができることなのか 何ができるようになればよいのか
学園の教育目標	社会の変化に対応し、自ら学び、知識・技能等を主体的に更新する力	【知識及び技能】 ・興味、関心のあることについて、情報を集める手段をもっている。 （インターネット、本など） 【思考力、判断力、表現力等】 ・得られた情報の中から必要なものを取捨選択することができる。 【学びに向かう力、人間性等】 ・粘り強く挑戦する力。 ・学んだことを日常生活に生かそうとする。	【知識及び技能】 ○新しい情報や知識を取得することができる。 【思考力、判断力、表現力等】 ○正しい（使える・新しい）情報を取得する力（能力）○情報の取捨選択ができる。 【学びに向かう力、人間性等】一自分の可能性を広げる、チャレンジ、アンテナを張ろうとする力 ○学習したことを生活と結びつけることができる。　○失敗しても前向きに苦手なことにも逃げない。 前項：課題解決のための正しい情報を取捨選択し、実生活と結びつけることができる。 2期では必要な情報を集め、それら情報を取捨選択する。 3期では、資料同士をつなげる。必要な情報をつなげる。	【知識及び技能】 ○インターネットや新聞、テレビ、ラジオ等の情報媒体を正しく使い、情報や知識・技能を取得する。 【思考力、判断力、表現力等】 ○情報を取捨選択し、自らのために課題に役立てることができる力 ○将来の進路を考えることができる力 ○社会の変化や新たに情報に対してアンテナを張る力 【学びに向かう力、人間性等】 ○ やりたいこと（Will）、できること(can)、やるべきこと(must)を考え自分の可能性を広げようとする。
	自ら問題を発見し、筋道立てて考えたり、試行錯誤したりしながら問題を解決する力	【知識及び技能】 ・体験や経験から課題を見つける。 ・身の回りに疑問をもつ。（どうなってるのかな？・・など） ・正しく理解する力 【思考力、判断力、表現力等】 ・よい工夫を考える（体育：ハードルの等距離、スタートのフォームなど） ・友達の考えを知り、活用したり考えを広めたりする。 【学びに向かう力、人間性等】 ・設定のある挑戦（がんばってみよう、ためしてみようと思えるようなステップで）	【知識及び技能】 ○今できることを正しく把握する。 【思考力、判断力、表現力等】 ○もっている知識・技能でどうしたら問題解決ができるかどうか判断する。 ○成功と失敗を繰り返すので、よりよい方法を見つける。 【学びに向かう力、人間性等】 ○挑戦し続けたり、よりよい方法を考える意欲 ○失敗から学ぼうとする姿勢	【知識及び技能】 ○現状を正しく把握できる力・課題を見つける力⇒問題を発見する 【思考力、判断力、表現力等】 ○多角的にとらえる（最重要である） ○解決方法の工夫 ○計画性 【学びに向かう力、人間性等】 ○挑戦する・繰り返す⇒つまり問題を解決しようとすること
	多様な人々との対話や協働を通じて、新たな価値やよりよい社会を創造していく力	【知識及び技能】 ・話し合いの進め方（役割分担の仕方／あいずちなど） ・自分の意見とその理由を言う。 【思考力、判断力、表現力等】 ・課題を解決する。（自分たちで） ・よりより解決方法を見つける。（既にあるものを活用して） 【学びに向かう力、人間性等】 ・前向きな姿 ・他者（の意見）を受け入れようとする姿勢(多様な文化も)	【知識及び技能】 ・他者と円滑にコミュニケーションをとることができる ・目的に合わせた話し合いの仕方を知っている。 【思考力、判断力、表現力等】 ・付加価値を高めることができる。 ・解決の質を高めることができる。 ・自他の考えを基にして、目的に合った判断をする。 【学びに向かう力、人間性等】 ・他者の考えを受け入れようとする。 ○伝える―受け入れる―創造する	【知識及び技能】 ○合意形成の力（受容と発信の力） ○コミュニケーションの技能 ○社会的な人間関係を築くことのできる基本的なスキル 【思考力、判断力、表現力等】 ○柔軟な発想 ○視点を移動させられる（他者の視点に立てる） ○相手の意見に歩み寄り、新たな意見や価値を見出すことができる 【学びに向かう力、人間性等】 ○合意形成の意欲 ○共感だけではなく、意見が異なる人とも粘り強く対話しようとする ○対立を恐れない強さ
	困難な場面に直面しても、ねばり強くかつ柔軟な発想で人生を切り拓いていく力	【知識及び技能】 ・困っていることや分からないことなど、自分のことを伝える ・困難を乗り越える方法を知る（先生、友達、親に聞いたり、調べたり） 【思考力、判断力、表現力等】 ・自分の考えをもつ 【学びに向かう力、人間性等】 ・初めてのことでも、分からないことでもやってみる ・チャレンジする	【知識及び技能】 ・問題で起こる出来事に気付き、自分事として捉える。 ・自分の思いを説明する、整理する。 ・困難を乗り越える方法を知る。（先生・友達・家族に聞く、前例を調べる） 【思考力、判断力、表現力等】 ・複数の選択肢にトライし、自分なりの解決を導く。 【学びに向かう力、人間性等】 ・何とか自分で（友達と）やれた！、努力してよかった！という実感を積み重ねる。	【知識及び技能】 ○困難さを具体化することができる。 ○ストレスの対処法を知っている。 【思考力、判断力、表現力等】 ○他者の助言を受け入れ、自分の気持ちや考え方を広げられる。 【学びに向かう力、人間性等】 ○あきらめずに、トライする。 ○失敗を受け入れることができる。

さあ、これで校種や学年を超えた義務教育９年間の一貫した指導の道筋と、教科等を横断して目指すゴールが共有されたことになります。

ここからはいよいよ教室での実践が始まりますが、その前に、私たちは最後の準備として教科等横断的な指導方法の工夫について検討しました。

STEP-5　資質・能力を育成するための指導の工夫を検討しましょう

学園目標に示した「自ら学ぶ力」「問題を発見・解決する力」「新たな価値を見出す力」「粘り強く柔軟な発想力」を育成するための工夫として私たちが導入したのは、思考ツール「マンダラート※」です。



マンダラートとは９つのマスの中央にテーマを書き、その周りに関連するキーワードを記入していくというシンプルな思考ツールです。マッピングなど自由度の高い他の思考ツールと比べると９マスという枠組みがあるため、「マスを埋める」という意識が発想を引き出したり、あるいは精選したりする効果があります。また、周りに記入した８つのキーワードの一つひとつをテーマに、新たなマンダラートを展開して考えを深めることもできます。

私たちがこのツールに注目した理由は、目的に応じて小学校低学年から中学生まで活用することが可能だと考えたからです。発達段階に合わせたマンダラートの開発は３校の学校図書館司書が担当し、まず読書指導のツールとして学年を超えて活用することを試みました。

例えば、小学校第２～５学年を対象とした読書指導では、多様な本の選び方への気付きを促すために、「どうやって借りる本を選ぶか」をテーマとしたマンダラートを児童が作成して互いに交流する活動を行ったり、小学校第２学年を対象とした調べ学習ではテーマに対して「何を知りたいか」を書き出すマンダラートを作成し、目的をもって学校図書館を活用する活動を行ったりするなど、その効果について実践的に検証を行いました。

なお、検証の一つとして中学校第２学年の社会科で教科担任と学校図書館司書のチーム・ティーチングを行った授業を本誌の「事例３」に掲載しています。

私たちが取り上げた「マンダラート」は指導の工夫の一例にすぎません。ただ、このように学年・教科を超えて共有できる「工夫」を導入することで、教科等横断的に資質・能力を育成する視点がより明確になると考えています。

※「マンダラート」　今泉浩晃氏によって考案された発想法の一つ

私たちは９年間で育む「資質・能力」をこのように整理しました

学園の教育目標である「４つの資質・能力」の一つ一つについて、何ができることなのか、どんな人に成長してほしいのか、学校と家庭・地域それぞれの立場から具体化し、それらを【知識及び技能】、【思考力、判断力、表現力等】、【学びに向かう力、人間性等】の３つの観点から整理しました。さらに、そうした資質・能力を育むために活用することができる地域の教育資源を「機会」、「人財」、「環境」の三つに分類して記載しています。

学園として児童・生徒に育みたい力は、いずれも義務教育９年間の３つの発達段階に応じて示していますので、この一覧を「学びの地図」として活用し、各教科、特別活動をはじめとしたすべての教育活動の目標や指導の重点を明確にすることで、横断的・段階的に実践を展開することができます。

三鷹の森学園の WEB ページでご覧いただけます

それでは、私たちの実践の中から、いくつかの事例を紹介します。

いずれも２つの授業で１つの事例としていますが、学年や教科が異なりますが、目指すゴール（資質・能力）は共有されているのがお分かりいただけるでしょうか。

事例１

教育目標１　社会の変化に対応し、自ら学び、知識・技能等を主体的に更新する力

小学校　理科
「水溶液の性質とはたらき」

中学校　技術科
「エネルギー変換に関する技術」

指導上の工夫

- ○　マンダラートを活用し、予想や仮説を基に、自ら解決方法を発想し、表現できるようにする。
- ○　未知の問題解決のために、マンダラートを用いて、新たに得た知識を取捨選択できるようにする。

理科（小学校第６学年）

〔授業の概要〕水に溶けているものに着目して、それらによる水溶液の性質や働きの違いを多面的に調べる活動を通して、水溶液の性質や働きについて理解を図り、実験などに関する技能を身に付けるとともに、主に妥当な考えをつくり出す力や主体的に問題解決しようする態度の育成をねらいとして授業を行った。

第１次の「水にとけている物」について調べる実験では、５種類の水溶液の違いを調べる方法を児童が自ら考え、その考えを用いて問題解決を図る授業展開とした。児童が予想や仮説を基に、自ら解決方法を発想し表現できるようマンダラートを活用した。

マンダラートの活用方法としては、まず、今回解決すべき課題「水溶液を見分ける方法は？」というワードを中心に置き、その解決方法を個人で考え、周りに書き出した。その後、個々に考えたものを４～５人のグループで共有し、より妥当な解決方法を練り上げていった。

マンダラートを活用することで、自らの思考を目に見える形で表現し、整理することができた。互いの思考を共有できたことで、全体での話し合いでは、根拠を基により良い解決方法への見方・考え方が深まった。その結果、児童が自らの力で主体的に知識・技能等を更新する力につながった。

技術科（中学校第２学年）

〔授業の概要〕第２学年では教材「Ｔｅｃｈ未来」を使用し、様々な要件に対応する電気自動車の製作を進めてきた。本時では、一つの国を選び、その国で車を売るとしたらどのような需要を満たす必要があるのかを考えさせる課題に取り組んだ。問題解決のための思考力を育成し、様々な情報を取捨選択できる力の育成を目標とした。

インターネットを使い情報を検索し、選んだ国の情報をマンダラートに記入して整理する。

検索する際には”国名”+”検索したい事項”を基本とするように指導し、情報源の信頼性についても考え情報を集めるように助言した。

得た情報を基に、どの観点から消費者の需要を満たすことができるのかを考える。

例　・　山が多いなら、トルクのある車がよいのか。

　　・　１世帯の人数が多いなら、車内空間が広いほうがよいのか。

得た情報を基に、どのような車を製作するのかを考える。製作する車には各項目のパラメータを１～５まで設定しており、合計 13 以下になるように設定させる。調べたことについて考え、どのような車を作るのか、トレードオフの関係を理解したうえで記述させる。

この事例のポイント

自らの知識では解決できない課題を与え、何をどうやって調べたらよいかを計画させる実践事例である。「知識の更新」を育成していくために「何を調べる必要があるのか」、「何を知りたいのか」を考えたり、話し合ったりするためにマンダラートを活用する。小学生には、マンダラートを使用することで、マスの中に自分の考えを書き出したいという意欲的な姿が見られた。また、思考を視覚化し共有することで、根拠をもとによりよい解決方法を導き出していた。中学生には、インターネットからの情報を入手させる上で、取捨選択して入手した情報の正しさについてどのように判断し、どう活用するかを考えさせることができた。主体的に問題を解決しようとする態度や知識・技能を更新する力につながった。

事例２

教育目標２　自ら問題を発見し、筋道立てて考えたり試行錯誤したりしながら問題を解決する力

小学校　体育科
「プレルボール」

中学校　理科
「化学変化とイオン」
（酸、アルカリとイオン）

<u>指導上の工夫</u>

○　様々な考えや気付きをマンダラートを使って可視化し、チームでの問題解決に生かす。

○　問題解決のために既習事項や既有の知識・経験を関連付け、根拠のある仮説の下に試行錯誤ができるようにする。

体育科（小学校第４学年）

〔授業の概要〕プレルボールはボールを手で弾いてワンバウンドさせてつなぎ、相手コートへ返球するゲームである。コートをコーンバーで区切り３対３でゲームを行う。１チーム４～５人とし、どちらかの得点になる度にローテーションして交代する。本単元では、チームの得点力を向上させるために考えを出し合い、試行錯誤しながらゲームを楽しむことを主なねらいとした。

ゲームは１単位時間で３回行い、その前後に作戦タイムとして話し合う時間を設定している。マンダラートはその作戦タイムで使用した。まず、第１ゲーム前の話し合いでは、前時の成果や課題を生かし、チーム内での共通理解を図ることを目的としてマンダラートに攻め方や動き方等を整理していった。

次に、１試合目終了後、２試合目終了後の話し合いで、マンダラートに書き込んだ内容について振り返り、新たに気づいたことや修正することを書き足していった。

最後に３ゲーム目終了後の話し合いでは、３ゲームを通してマンダラートに書き溜めた攻め方や動き方をチーム内で評価し、それを次時に活用できるようにつなげていった。

マンダラートを作戦タイムで活用したことで、チームの課題が明確になり、ゲームを重ねるごとにその解決方法をより良いものに更新していくことができた。１単位時間だけでなく単元を通してマンダラートを活用してきたことで話し合いがより活発になり、単元前半に見られなかった攻め方や動き方がゲームの中で見られ、技能面での質的向上にもつながった。

理科（中学校第３学年）

〔授業の概要〕これまでに実験を通してイオンの存在や成り立ちを理解し、イオンのモデルを用いて、電池の仕組みや酸性やアルカリ性の水溶液の性質について学習している。本時では、畑の土に消石灰などを撒いて、土壌の改良を行うことを例にあげ、酸の水溶液にアルカリの水溶液を混ぜ合わせると、どうなるのか考えさせる。根拠のある仮説を立て、それを証明するための実験計画を立てる。

『畑の土壌のｐＨ調整をするために、消石灰を撒く』という事例をもとに、今までの学習を振り返りながら【課題】について実験計画を立てさせた。

【課題】酸の水溶液とアルカリの水溶液を混ぜ合わせると、
水溶液の性質や働きは、どうなるのだろうか。

① マンダラートを用いて、キーワードや既習事項を上げさせた。知識を関連付けて新たな発見を促すために、８つのマスを起点にさらに新たな発想を展開させることで、酸やアルカリなどの理科的な内容にとどまらず、何かを“混ぜ合わせる”ことの意味にも注目させた。

② ４人ずつのグループで、マンダラートに記入された言葉を共有し、空欄がある生徒はグループで出た意見を参考にし、ペンの色を変えて記入させた。

生徒のマンダラートには既習事項の他に「絵具（色を混ぜると変わる）」「家庭用漂白剤などに『混ぜるな危険』の表示があること」などの記入が見られた。

③ マンダラートの記入を関連付けてグループごとに複数の仮説を立てさせ、その仮説を証明するための実験計画を作成し立て、最後に全体で発表を行った。

この事例のポイント

「課題は何か」、「解決するにはどんな方法があるのか」ということについてグループで試行錯誤しながら問題を解決していく授業実践である。マンダラートに記入した言葉を共有することで、関連付けを行ったり、根拠のある仮説を立てたりして、検証の仕方を計画する方法を導き出す姿が見られた。話し合いがより活発になっていっただけではなく、結果を踏まえてよりよいものに更新していったことで、一人一人の技能が向上した。目指す資質・能力である「自ら課題発見し、筋道を考えたり、試行錯誤したりしながら問題を解決する力」を育むことができた。

事例３

教育目標３　多様な人々との対話や協働を通じて、新たな価値やよりよい社会を創造していく力

小学校　国語科
「話し合って考えを深めよう」
（話すこと・聞くこと）

中学校　社会科
歴史的分野「時代の大観」
地理的分野「地域調査」

指導上の工夫

○　対話と協働のために必要な技能について、実践と振り返りを通して体感的に学ばせる。

○　思考ツールによって多面的・多角的なものの見方と対話を促し、価値的知識への理解を深める。

国語科（小学校第６学年）

〔授業の概要〕新たな価値の創造には、他者との対話が欠かせない。討論会形式で複数回議論を重ねる中で、建設的な話し合いをする際に必要な話し方・聞き方を具体的に模索することに主眼を置いた。特に、聴衆側の聞き方の学習に重点を置き、論題への理解が深まる意義ある議論には、主張の客観性を批評する視点、主張を比較し争点を見抜く視点、受容的かつ的確に質問することの重要性に迫った。

道徳科の授業で、「『世界人権宣言』を守っていくために必要なことは何か？」と問いかけた。児童から「世界的な問題を解決するには、自分たちの話し合いの質を高める必要がある」という考えを引き出し、国語科「話し合うこと」の学習の動機付けとした。

全員に主張者を経験させるため、８つの論題を用意した。一つの議論を終える度に、全員で主張に説得力があったか批評し合い、教師の解説も加えた。児童は、①論題に対する自分の考え方を説明することや、②考え方の正当性を裏付ける、数値や写真といった客観的な資料の必要性に気付いていった。

的を射た質問をすることは、とても難しい。教師が聞き手から出た質問の意図を問い返すなどして、聞き方についても整理した。多くの児童が、①主張者たちの考えを正確に比較すること、②受容的かつ的確な質問によって議論が深まることなどを体感でき、論題への見方・考え方の深まりを楽しんでいた。

社会科（中学校第２学年）

〔授業の概要〕よりよい社会の実現をテーマに、「よりよい」ことの意味について多面的・多角的に捉え、社会の多様性に気付かせることをねらった。地理的分野では地域の課題解決を通して、歴史的分野では時代の大観と既習事項を関連付けることで、「よりよい」ことの意味を追究する力の育成を図る。

マンダラートに自分の興味・関心やよりよい社会に向けて解決するべき地域の課題を書き出した。作成したマンダラートを基にどのような課題が地域に存在するのかを話し合い、地域調査の計画を練り直した。生徒間の対話によって「よりよい社会」を多面的・多角的に捉えることができるようにした。

学校図書館司書とのチーム・ティーチングで授業を行い、図書資料の調べ方やメディアリテラシーに関する講義を行ったうえで、練り直した計画をもとに実際に学校図書館で図書資料を調べる学習を行った。調査項目が明確になっているため、授業以外にも地域の図書館を利用して学習を進める生徒が見られた。

市民革命の共通点について付箋紙を用いて整理し、人権や政治体制の変化を確認したうえで、市民革命がヨーロッパ社会にもたらした政治面、社会面の影響として考えられることを一人ひとりの意見としてマトリクス上に表示させた。互いの考えにある違いやズレの理由を検討し合うことを通して、近代社会の在り方について考えることへと深めていった。

この事例のポイント

新たな価値やよりよい社会を創造していくための「対話」を技能的な側面から取り上げた実践事例である。「正しい答え」だけにこだわるのではなく、答えを導き出すまでの過程において、思考ツールの活用や客観的資料の必要性、受容的かつ的確な質問の仕方など「対話」の仕方（技能）を学び、自分の力にしていく授業である。主張はすれども相手の気持ちや考えを受け入れるような聞き方が苦手な児童・生徒、人に流され自分の考えを示すことが苦手な児童・生徒などが見られる。そこで、「対話」を促進させ、そこから他者理解・自己理解が深まることで、目指す資質「多様な人々との対話や協働を通じて、新たな価値やよりよい社会を創造していく力」の育成につながっていった。

事例４

教育目標４　困難な場面に直面しても、粘り強くかつ柔軟な発想で人生を切り拓いていく力

外国語科
「Unit7 What do you want?」
レストランの注文をしよう

家庭科
「調理と食文化」
外国からのお客様を和食でおもてなし

<u>指導上の工夫</u>

- ○　ドル札と円札を用意し、トラブルを疑似的に起こすなど臨場感溢れる設定にする。
- ○　献立作成の配慮事項を段階的に追加し、条件に合ったよりよいものになるよう工夫させる。

外国語科（小学校第５学年）

〔授業の概要〕紙幣は、ドル札と円札を用意する。レストランの会話をしている中で、状況設定を変え、疑似的にトラブルを起こす。(BSE 問題で牛肉禁止・冷夏で野菜が使えない・日本に地震が起こり円安になる、等）それぞれの困難な状況設定の中で、メニューを変え会話内容を変えながら英語で会話をし続けることを目指す。

最初のトラブルは、「冷夏により野菜と果物が手に入らなくなる」という設定だった。初めての状況に戸惑う児童たち。状況が分からずに、フルーツパフェをそのまま販売する児童もいたが、友達に”No fruits!”と言われて、理解をしていく。

最初の野菜と果物販売の禁止が解除されるとすぐに、「BSE 問題により、牛肉と乳製品使用禁止」の状況が設定される。カフェを経営していた児童が戸惑うが、別の友達に「豆乳はどう？」と言われ、教師に「豆乳は英語で何と言いますか？」と質問をする。”Soy milk.”とメニューに加えて、販売を再開

最後の状況は、「日本に地震が起こって、円安になる」という設定だった。＄１＝￥100 だったのが、＄１＝￥200 になり、大慌ての児童がいる一方で、中には「先生、そこまで困りません！」という児童もいた。サービスをしたり、セットメニューにしたりするなど、柔軟に対応しながら商売を続ける姿が見られた。

家庭科（中学校第１学年）

〔授業の概要〕食生活分野では栄養バランス・献立作成・食文化・和食の特徴などを学習している。和食の特徴を学ぶ授業ではマンダラートを用いて学習し、多くの生徒が改めて和食の良さに気付いた。本時は「2021 年のオリンピック、パラリンピックで三鷹市を訪れる外国の方を招き、手作りの和食（3 品）でおもてなしをするための献立を考える」を課題とし、献立作成の条件を途中で追加していった。

授業の進め方

① 献立作成の配慮事項（献立構成・季節感等）を伝え個人で考える。
② 班でアイデアを共有し、献立を決める。
③ 追加された配慮事項（費用・衛生面・調理法・味のバランス・見栄え・提供方法・楽しんでもらえる工夫等）を考慮して考え直す。
④ さらに班ごとに与えられた配慮事項（アレルギー・宗教・郷土料理・三鷹の食材・環境問題等）を考慮して献立を工夫する。

班で学習する際には教科書・ノートだけではなく、これまでに学習したプリント、用意した参考図書、タブレット PC などを活用しながら話し合う姿が見られた。特に、資料として用意した 1 年分の学校給食の献立を参考にする班は多く、あらためて「食べる相手を考えて作ることの大切さ」に気付いた様子だった。

教師から次々に示される配慮事項をクリアして献立を完成させるために生徒は活発にアイデアを出し合っていた。授業後の振り返りでは、難しい課題や場面を切り抜けるためには「本や資料などを調べる」「想像力を生かし、シミュレーションしてみる」「条件を整理し一つずつ課題をクリアする」「視点を変えてみることが大切」「周りの賛同が得られなければ得られるような工夫を考える」などの記述が見られた。

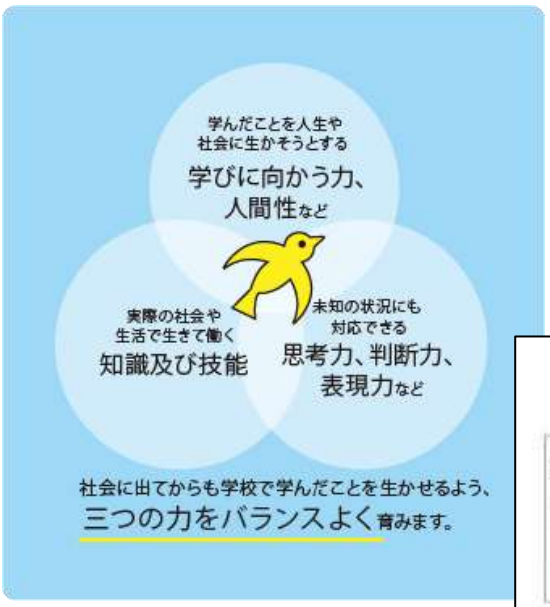
この事例のポイント

教育目標に「粘り強く」という言葉があっても、教科の授業で意図的にこの資質・能力の育成を目指すことはあまり行われてこなかった。この事例は、想定外のトラブルや普段あまり接することがない外国の方へのおもてなしという「非日常」の場面を設定することで、既習事項を活用しながら、粘り強く、柔軟に課題解決に取り組む力を発揮させることを計画したものである。小学生にとっては英語を使うことに慣れていないことに加えてさらに困難な状況設定が示される。中学生には自国の文化と異文化への理解と配慮という現実的に直面し得る課題が次々に指摘される。いずれの授業においても困難な課題の解決に向けて児童・生徒が意欲的に取り組む姿が見られた。

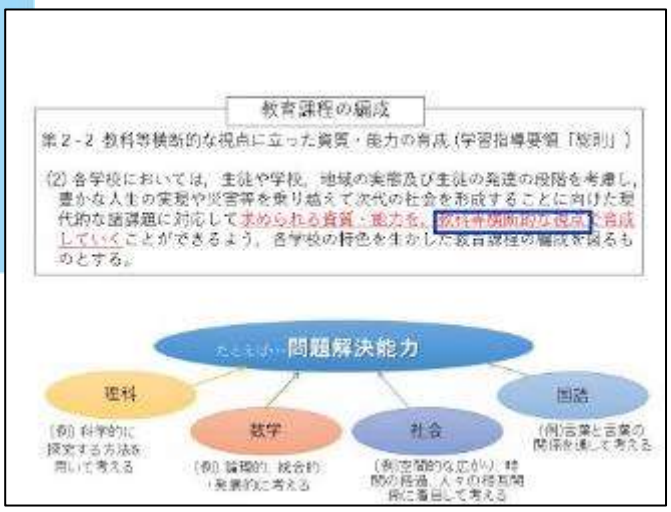
始めよう！　カリキュラム・マネジメント

この「カリキュラム・マネジメント・ガイド」に示したのは、あくまでもカリキュラム・マネジメントの展開例であり、私たち三鷹の森学園がコミュニティ・スクール委員会と共に４年間をかけて取り組んできたことに基づく提案でもあります。

「教科等横断的な視点」からの教育課程の編成には各教科の内容を結び付ける「合科的」な切り口や、ＳＤＧｓのような現代的な諸課題への取組みを軸とした展開など、様々な方法が考えられます。ここで私たちが提案しているのは「コンテンツ」をベースとするのではなく、「コンピテンシー（資質・能力）」をベースとしたカリキュラム・マネジメントの実践です。



小・中一貫教育というフィールドにおいて私たちが重視したのは、どの学年でも、どの教科でも、日常の実践の一つ一つが子供たちに目指す力を育むための大切なピースとして成立するということです。



地域の教育資源の活用など、今後の課題は多々ありますが、私たちは未来に向けて途切れることのない実践のビジョンを手にすることができたと考えています。

本誌を手にされた皆さんが、自校の目指す教育の実現と、子供たちに未来を生きる力を育むために参考としていただけることを期待しています。

さあ、私たちと一緒にカリキュラム・マネジメントを始めましょう！

三鷹の森学園カリキュラム・マネジメント・ガイド
－教科等横断的な視点からのカリキュラムづくり－

発　行　令和３年２月 26 日
編　集　三鷹の森学園研究部
発行者　三鷹の森学園三鷹市立第五小学校
　　三鷹の森学園三鷹市立高山小学校
　　三鷹の森学園三鷹市立第三中学校

※三鷹市では、学校と家庭、地域が一緒に子供たちの生きる力を育む取り組みを行っており、本学園の研究においても、ご家庭や地域の協力を得ながらやってまいりました。
このような経緯から、学校教育法において使用される「児童」、「生徒」だけでなく、「子供」、「子供たち」の表記も使用しています。

How To
Design
Curriculum

カリキュラム・マネジメント・ガイド

ー教科等横断的な視点からのカリキュラムづくりー

令和元年度・２年度 三鷹市教育委員会研究協力校
三鷹の森学園
三鷹市立第五小学校・三鷹市立高山小学校・三鷹市立第三中学校